

## 1列王記 21 章 25-26 節 「主のゆずりの地」

### 1A 主にあって守る物

### 2A 売り渡し

### 3A そそのかし

### 4A 委ねられたもの

#### 1B しっかりとした保持

#### 2B きっぱりとした拒否

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、列王記第一の最後に来ました。午後礼拝では 21-22 章を学びます。アハブ王がついに死に絶えます。今朝は、このアハブの生涯をまとめた一文を読んで、そこから私たちに与えられている主の御心を知りたいと思います。

25 アハブのように、裏切って主の目の前に悪を行なった者はだれもいなかった。彼の妻イゼベルが彼をそそのかしたからである。26 彼は偶像につき従い、主がイスラエル人の前から追い払われたエモリ人がしたとおりのことをして、忌みきらうべきことを大に行なった。

これは、アハブがナボテのぶどう畑を奪い取った事件の後に書かれてあるものです。アハブの宮殿のそばに、ナボテはぶどう畑を持っていました。アハブは、すぐ隣にあるからそこを野菜畑にしたい、それ相当の代価を払おうと言いました。ところが、ナボテは「主によって、私には、ありえないことです。私の先祖のゆずりの地をあなたに与えるとは。(3 節)」とはっきりと言いました。それでアハブは不機嫌になり、ベットから起き上がりもしなかったところ、妻のイゼベルがなんと、アハブの印鑑を使って、彼の命令として、ナボテを死刑にせしめました。アハブは、ナボテが死んだ後にそのぶどう畑を自分のものにしようとやって来た時に、預言者エリヤがやってきて、アハブが主の目に悪を行ない、彼の家がイスラエルにおいて断ち滅ぼされることを告げました。

### 1A 主にあって守る物

アハブがナボテのところにやって来た時のアハブの言葉は、一見、とても丁重に見えます。王であるのなら、当時の王政の感覚であれば、民の土地を得るのはその権利があります。強奪するのではなく、土地の所有者に話し合いにまでやって来て、さらに相当の代価を支払うとまで言っています。そしてナボテが、王に対して非常に無礼であるようにも聞こえます。「私の先祖のゆずりの地をあなたに与えるとは。」という言葉には、王に対する見下しにさえ聞こえる口調があります。しかし、実際はナボテが正しいのであり、彼は真実に立っていたのです。

ナボテが話していた先祖のゆずりの地とは、主なる神によって割り当てられた約束の地のことで、レビ記において、主がイスラエルの民に割り当てられた土地を決して他者に譲り渡してはならないことを告げていました。「地は買い戻しの権利を放棄して、売ってはならない。地はわたしのものであるから。あなたがたはわたしのもとに居留している異国人である。(25:23)」ナボテが受け継いでいた地は、単に先祖代々の土地という意味ではなく、主ご自身のものであるというのが前提でした。そしてその土地を受け継ぐというのは、主によって渡されたものをしっかりと保持するということを意味していました。主なる神から与えられたからこそ尊厳があり、売り渡さない、あるいは明け渡さないからこそ、主に対する捧げ物を果たさせることができます。だから、ナボテはたとえ王からの要求であっても、引き渡すことはできなかったのです。

私たち人間には、神に与えられた尊厳、あるいは賜物があります。初めに、この命があるでしょう。十戒に、「殺してはならない」という戒めがあります。生命は神が与えられたものであり、だからこそ尊厳があり、いや神聖なものです。この命をいかに質の良いものにするかは、本人の我がままでも何でもなく、神から与えられた使命であります。そして、他者の命をどうのこう言えないというのは、根本的な真理です。

私が、ニュースを読んでいて時々腹立たしくなる時がありますが、最近では、新型の出生前診断というものが四月から施行されたというものでした。赤ちゃんの出生前に、染色体異常があるかないかを診断するというものです。ニュースを見れば、異常が見受けられる検査結果が出た場合は九割が中絶を考える、ということでした。こういうことが当たり前のように語られている。ようやく、ダウン症の子たちを育てている親たちの意見が出始めましたが、障害があるなら中絶という姿勢は障害者に対する“冒瀆”であります。命というのは、他者がとやかく言えないものなのです。自分たちの都合でどうにかしようという発想は、まさに、アハブがナボテに対して土地を譲ってもらいたいと願っているのと同じであります。

そして私たちには、神から与えられた人間関係があります。十戒には、「あなたの父と母を敬いなさい」という戒めがあります。親も神から与えられたものです。私たちは、「敬いなさい」という命令を思い巡らさなければいけないでしょう。なぜならば、親が自分の命を与えたと誤解しているからです。親が自分の命を与えたと思っているのに、親が願っていることはかなえてあげないといけません。多くの人が、親が信仰を持つことに反対しているのに、自分は信仰を持つに至っていないと言います。いいえ、親が命を与えたのではなく、神が与えたのです。親という関係をも、神が与えたものです。神の命令に従うことこそが、親を敬う最短距離の近道です。

その他、私たちキリスト者には、「キリストが愛されたように、互いに愛し合いなさい」という戒めがあります。この関係も神が与えられたものですから、自分の好き嫌いで決めるのではなく、守らなければいけません。そしてさらに、一般的な他者に対する「自分自身のように隣人を愛しなさい」

という命令があります。他者に親切にすることは、自分の満足のためではなく、神がその人を自分の前に置かれたから親切にします。

そして、神から与えられた尊厳として「性」があります。十戒には、「姦淫してはならない」という戒めがあります。胎児の時にすでに造られる性器は、成人になって結婚という、男女として結ばれる関係のために、神が与えられた尊い体の器官です。女性として生まれたこと、男性として生まれたことは神が与えられた賜物であり、神の願われるように用いるためにしっかりと保っていくところに、真の豊かさがあります。

女がその純潔を守ることを、親が若い時から教え、また守ってあげる必要がありますし、男は、聖書では「泉を外に散らしてはいけない」と戒められています。「あなたの水ためから、水を飲め。豊かな水をあなたの井戸から。あなたの泉を外に散らし、通りを水路にしてよいものか。(箴言 5:15-16)」これは、自分の性欲を見知らぬ女や他人の妻に使ってはならない、もしそれを行なったら豊かな潤いを失うことになるという戒めです。最近是有名な政治家が風俗を活用することを奨励したようですが、それは相手の女性はもちろんのこと、男性に神が与えられた尊厳をめちゃくちゃにする行為であることは、男性であればよく分かることでしょう。

そして人には、神から与えられた財産があります。「盗んではならない」という戒めがありますが、それは他者のものを盗むということの戒めだけではなく、自分の持っているものを散財し、浪費することも、盗むことにつながります。神は財産を私たちが楽しむように与えてくださいました。そして、神が財産を与えられたことを感謝するために、私たちは神に財産をもって礼拝します。このように財産をしっかりと管理することによって、神から与えられた富を喜び楽しむことができます。パウロは、「私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。(1テモテ 6:17)」と言いました。

そして財産の中には、単なる金銭だけでなく、自分に与えられた時間や能力のこともあるでしょう。これらが主から与えられたものとしてしっかりと保持し、管理し、また育成していくのです。

## **2A 売り渡し**

ナボテは、こうした使命をもってアハブの願いをはっきりと断りました。その反面、アハブ自身は正反対の人生を送りました。「アハブのように、裏切って主の目の前に悪を行なった」とありますが、この「裏切る」というヘブル語は、「売り渡す」という意味です。口語訳や新共同訳は、「身をゆだねる」と訳しています。新共同訳では「主の目に悪とされることに身をゆだねた者」となっています。

レビ記における、土地に関する戒めで、貧しい者が土地を売り渡す時には、近親者がそれを買戻さなければいけないという命令があります。そして、土地だけでなく自分自身を身売りしてしま

う時は、何としてでも近親者が買い戻さなければいけないと強く戒めています。しかしアハブは、自分の魂を悪に売り渡し、自分自身を奴隷にしていると言いかえることができます。

先ほど十戒の戒めをいくつか引用しましたが、神の律法の話を知るとそれは自分を制限して、窮屈にしていると感じてしまいます。けれども説明しましたように、律法は自分の人生にある尊厳を神が最大限にまで引き出すために設けてくださった道筋であることがお分かりになったでしょう。神によって造られた私たちが最も幸福に生きることのできる知恵は、神ご自身が持つておられます。私たちには、この方法では幸せになれないと思っていても、実は神を畏れ敬うことが最も幸福になることができ、自分自身を労ることができるのです。

けれども、自分はこれを行なわなければやっていけないと思います。神の掟の中で生きるのでは自分は窮屈でしかたがないと思います。そこで、まったく自由になろうと思います。自分の願っていること、その欲求をとことん追求してみようと思います。「彼は偶像につき従い、主がイスラエル人の前から追い払われたエモリ人がしたとおりのことをして、忌みきらうべきことを大いに行なった。」とありましたが、大いに行おうと思います。それでこそ、真の自由人だと思うわけです。

ところが、それは魂を売り渡す行為です。「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。(ローマ 6:16)」一度、自分の欲求に身をゆだねると、そこで自分は滅びへの道へ進むことを知ります。自分が自分ではなくなります。その欲求、欲望の虜になっていることを知ります。それなしには生きていけない存在になり果てているのを知ります。自分ではどうにもできない状態に陥ります。もうこんな生き方をしてはどうにもならないと思っていながら、やはりそれを行なわざるを得ないのです。そして、アハブはこれから自分自身が滅び、また自分の家が木端微塵に滅ぼされる道を進みます。これが魂を売り渡した者の行きつく所なのです。

### 3A そのおかし

そしてアハブの一連の行いの背後には、彼をそのおかしにしていた妻の存在がありました。「彼の妻イゼベルが彼をそのおかしにしたからである」とあります。ここの「唆す」と訳されているものは、元々は「強く促す」という言葉になります。もちろん強く促す自体は、決して悪いことではありません。英語に urge という言葉があり、日本語では「勧める」という言葉があります。例えば、私が五月初めに行われた日本カルバリーチャペル・カンファレンスに参加することを強く勧めましたが、これは良いことです。強く促す働きは教会の中で必要です。

けれども悪い意味でこの行動に出るとき、それは唆しになります。アハブは、ナボテから土地譲渡をきっぱりと断られた時に、ふてくされてベットに寝ていましたが、それは、彼がナボテの意志が

正しいことを認めざるを得なかったからです。それでも、やっぱり欲しいという欲望を押えられなかったので落ち込んでいたのです。ところが、イゼベルは土地を王権で奪い取ることを強く促しました。彼の指輪にある印を使い、アハブの手紙ということで、偽りの証言者を立て、ナボテが神と王を罵ったということにして、彼を石打ちの刑にしたのです。

このイゼベルの行いを、アハブ自身がいつしか学ぶようになり、ユダの王ヨシャパテを唆しました。ラモテ・ギルアデを奪い取るための戦争に彼を参加させました。ヨシャパテは、幾度か、「預言者はあなたがたのところにはいないのですか？」と尋ね、その行動への疑念を発しましたが、アハブは参戦を強く促したのです。もしイゼベルがいなければ、アハブはただの我が儘な甘えん坊だけであつたかもしれませんが、この女がいたことによって、徹底的に悪を行なうようになったのです。

私たちの周りには、唆しがいっぱいです。ある個人から直接受ける時もありますが、いつの間にかその流れに人を促していく空気があります。自殺防止のために活動している専門家が行っていましたが、有名人が自殺した報道があると、必ず他に自殺する人々が出てくるそうです。けれども日本の場合はその人数が桁外れに多いそうです。彼によると、日本人はそれとなく言う、暗示する、というものに弱いのだそうです。自殺するよう持って行く空気を多くの者たちが作り出している、ということです。

唆しの特徴は、唆す本人はその行動の責任を取らない、ということです。イゼベルがナボテを殺しましたが、ナボテの印を使って、ナボテの手紙としてそれを行なうことによって、彼女には直接責任がないようにしました。悪魔はエバを惑わし、エバは自分も食べただけでなくアダムに食べるように唆しましたが、罪を犯したのはアダムであり、彼が罪を犯したことによって世界に罪が入りました。悪魔は裁かれますが、人はその罪によって死ななければいけないのです。

#### **4A 委ねられたもの**

では、私たちはどのようにして、唆しから自分を守るべきでしょうか？

##### **1B しっかりとした保持**

パウロが若い牧者テモテに対して、こう強く勧めました。「あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。(2テモテ 1:14)」自分が神に委ねられている良いものを、聖霊によってしっかりと守っていく、ということです。

私たちは、現代社会の中に生きており、消費するということが否応なく価値観として身につけています。それで、「これをやってみたら」という誘いの言葉に囲まれています。けれども、何かを成し遂げる時には、数は多くない、いやたった一つのことであっても、それを守り、それを培い、大切に養い、育てていくことによって、初めて結実を見ることができます。

私は高校、また大学の時に英語を習いたいという気持ちがものすごく強くて、それでいろいろな教材を買いました。さらに、英会話教室にもお金を払いましたが、すべてお金が出ていだけでした。けれども、NHK のラジオ英会話を続けていました。費用も教材代の一か月確か、二・三百円だけで、もちろんラジオはただです。結局、これが一番役に立ちました。ラジオを録音し、テキストにある会話を全部覚えました。

昔の人には、数多くの天才と呼ばれる人たちがいますが、例えば英語の欽定訳という聖書を訳した人々の中には、50 ぐらいの言語を操る人がいたと言われます。私の妻は、「昔の人は、時間があったからね。」という感想を言います。「これをしたらよい」という煩いや唆しが無い分だけ、言語習得に集中することができたのです。これだけ情報のある時代になって、実は、現代の私たちのほうが退化しています。

これは靈的な事柄でも同じです。皆さんの周りに、キリスト教関連であっても、いろいろ行なったらよい、買ったらよい、読んでみたらよい、見てみたらよい、という誘いはたくさんあります。その一つ一つは、必ずしも間違っただけのものではありません。けれども、それらは真実に神の声を聞くときにかえって雑音になることさえあります。聖書時代の聖徒たちが、あれだけ神の声をはっきり聴くことができたのは、現代社会にある情報の氾濫がかえって無かったからでしょう。実質的な靈的成長は、与えられたものを、しっかりと守っていくことによってもたらされるのです。

聖書には、「朝毎にいけにえをささげる」という言葉があります。朝起きて仕事をする前に、主にいけにえを捧げるのですが、主から声を聞き、また主に祈るという時間が必要です。ただこれだけです。祈り、そして聖書の言葉を読み、そしてそこから神の声を聞き、そして従います。この靈的な営みが、ちょうど朝食を毎日取っている子供と同じような効果を発揮します。実質的な聖霊の働きを、その人の生活に見ることができるようになります。

イエス様ご自身はどうでしたでしょうか？ルカによる福音書には、「イエスはひとりで祈っておられた(例:9:18)」という言葉で満ちています。神の御子であるイエス様が、人として生きておられた時に、どうしても独りで父なる神に祈る必要があったのです。これが原動力となり、日々の数多くの働きの支えとなっていました。

とても大切なことは、遠くを見て探しにいかなくても良いです。実は既にあるものです。自分の目の前にあるものです。パウロは言いました。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ 12:3)」神によって与えられた恵みから、私たちは出たはいけません。これをしたらよい、あれをしたらよいと思って、神の恵みではなく、自分自身で何かをしていることがしばしばあります。そう

ではなく、ちょうどナボテが、主から与えられ、先祖によって守られた土地をしっかりと守ったように、その恵みにしっかりとつながっているのです。その中で、神の分け与えてくださった賜物を用いて、数々の働きをすることができます。

## 2B きっぱりとした拒否

唆しから守られるもう一つの方法は、「きっぱりと断る」あるいは、「関わりを断ち切る」ということです。「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。(2コリント 6:14)」

誘われるからそれを行なう、他の皆が行っているからそれを行なう、というのは、世の価値観です。神から与えられているものを守るために、はっきりと断る勇気が必要です。エバが、アダムから、善悪の知識の木から実を取って食べてはならないという言葉聞き、エバがアダムの言うことを保持していれば、蛇の惑わしに対して、きっぱりと断ることができました。断るには強い圧力が自分にかかります。それでも断るのです。

また、目に見えるからそれを行なうというのも、世の価値観です。今、主から与えられているものだと言えないことを、目に見えるからという理由でただ行い続けられれば、守り、培い、育てるという営みを放棄することになります。たとえ自分の気持ちが付いて来なくても、あえて目に見えていることを行なわないという勇気も必要です。

最後に、実をたくさん結ばせた人の喩えについて、イエス様が語られた言葉を紹介します。「しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。(ルカ 8:15)」第一に、正しい、良い心でみことばを聞くこと。そして第二にしっかりと守ること。第三によく耐えること。そして実を結ばせます。この喩えでは、百倍の実を結ばせることができるとイエス様は言われます。これは誇張ではありません。主の御霊の働きは、百倍の実を結ばせることができます。けれどもその百倍は、このような地道な営みを、丹念に行い、そこから逸れないでいることによってもたらされます。